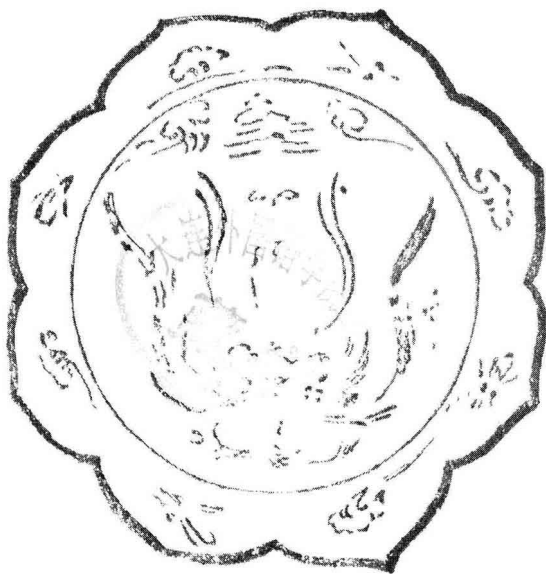


原文対照

大鏡新講

橘 純 一 著



訂 正 版

武蔵野書院刊

昭和二十九年五月十五日 印刷
昭和二十九年五月二十日 發行
昭和四十八年七月十日 十一版發行

大鏡新講

定價二〇〇〇円

編者 橘 純 一

東京都千代田区神田錦町三ノ十一
發行者 前 田 武

東京都文京区白山三丁目一ノ四
印刷者 柿崎 忠 一 郎

東京都千代田区神田錦町三ノ十一

發行所 合名 会社 武蔵野書院

電話東京(0)四八五九番(代)
振替口座東京六七一四六番

凡 例

一、本書の本文は、佐藤球氏著大鏡詳解の本文を底本とし、千葉胤明氏所蔵本（三卷本の一部、古典保存会複製）、岩波文庫本（尾張徳川家所蔵、応永九年奥書古写本に拠り、和田英松博士の校訂せる活版本）、久米幹文博士の校訂本（明治二十四年刊、八巻板本）、流布板本（三鏡同刊の無刊記八巻整板本）、史籍集覽本、国史大系本等を参照し、本文の異同ある部分は、宜しと信ずる所をとった。

一、本書本文中、「ハ」を以て囲んだ部分は、多くは千葉本・尾州家本等、古本系統に見えぬ章句であるが、学習用本文としては、これを除かずに読んだ方がよいと思われるものである。尤も、古本系統に見えぬ章句でも、寧ろこれある方がよいと考えられ、且それが長文である場合には、「ハ」を省いた部分もある。又「ハ」を以て囲んだ部分は、多くは後人の註記の攪入と思われる部分である。

一、本書の通釈は、大体に於て、逐語的直訳体を探った。その結果、通釈文そのものは、現代語の表現としては、随分無理な言いまわしが多い。例えば、「宮の御ぐしのいとをかしげにおはしますを、さぐり申させ給ひて」（三條紀）「大入道殿にこそ似たてまつらせ給へりけれ」（同上）の圈点部を、それぞれ「おさぐり申上げなさて」「お似申上げていらっしやいました」と訳した類である。これは、「申す」或は「奉る」という謙讓補助動詞と、「給ふ」という崇敬補助動詞の重用を現代語でそのまま忠実に直訳したのである。然し、現代語表現としては、こういう重用は既に廃れ、謙讓補助動詞が崇敬補助動詞かいずれか一つを用いれば、敬語表現として十分な事になっているのであるから、それでこういう訳文は、いかにもくどくどしいへんないまわしと感ぜられるのである。本書が、こんな現代語とし実際には用いられないような言いまわしをも敢えてしたのは、講釈に対し日頃私の懷抱する主張に因るのであるが、今之を披瀝する事はやめる。とにかく

く、こういう訳し方が、古文に對する意識的理解を薦める一方法である事はたしかだと信じている。こういう講訳態度であるから、本書中敬語表現や時法表現で、不審に思われる箇所は、正直にその由を註記しておいた。

一、原文の意義を明瞭に解説する為、特に語句を補う必要がある場合、これら補助解説の部分は、「」を以て囲んでおいた。されば「」の部分をとばして読めば、原文に該当する訳文となるのである。その補い方のやや変則な場合の例を挙げておく。

〔原文〕 あのだ獄の鼎のはたに、頭うちあて、三宝の御名思ひ出でけむ人のやうなることなりや。(道隆伝)

〔通釈〕 彼の、地獄の釜の縁(註略ス)に頭を打ちあて、その際になつて、やっと三宝(註略ス)の御名を思ひ出し「始めて、南無三宝と唱へ」たという人のような話でありますわ。——本書

一、通釈及び語句の註をするに當つては、故佐藤球氏の「大鏡詳解」、故関根正直博士の「大鏡新註」を参考した事が最も多い。お二人の故人のみ靈に、甚深の感謝を捧げる。

一、語句の註釈と相補つて、読者の理解を助ける為に、適当な箇所系図を配し、通釈文中に若干の挿図を入れた。系図は尊卑分脈を参照して編し、挿絵図版は武蔵野書院編集部所蔵のものを用了が、煩雜を厭い一一その出拠を挙げなかったが、それぞれ根拠あるものの中より選定した。

一、終に臨み、本書の成稿につき、直接間接の参考資料を供せられた古今の先輩學者に對し、又筆記、校正、索引の整理等を担任して下さった慶野正次氏並に小松登美氏に對しあつく謝意を表し、特に本書の題簽を御揮毫賜った東京教育大學教授佐伯梅友先生に甚深の感謝をささげる。

昭和二十八年十二月

著 者 識

原文對照大鏡新講目次

凡例

底本影印 (古典保存會複製千葉本)

平安京之圖 (大内裏の位置廊大)

中京師圖の一部

宮城

内裏

紫宸殿正面 (現今)・御帳之間 (現今) 平面圖と扁額

清涼殿正面 (現今)・殿上之間 (現今) 平面圖

道長筆御堂関白記

解題

大鏡人物年表

本文目次

序 帝紀

五十五代(文德天皇)

五十六代(清和天皇)

五十七代(陽成天皇)

四三

五十八代(光孝天皇)

五十九代(宇多天皇)

六十代(醍醐天皇)

六十一代(朱雀天皇)

六十二代(村上天皇)

五七

七一

扉の二

五

六

七

八

九

一〇

一四

一一

一五

大臣列傳

六十三代(冷泉天皇).....	七
六十四代(圓融天皇).....	五
六十五代(花山天皇).....	七
六十六代(一條天皇).....	八一
六十七代(三條天皇).....	八二
六十八代(當代 ^{後一條天皇}).....	八七
大臣列傳	
左大臣冬嗣.....	九
太政大臣良房.....	一〇〇
右大臣良相.....	一〇三
權中納言長良.....	一〇四
太政大臣基經.....	一〇四
左大臣時平.....	一〇
右大臣仲平.....	一三
太政大臣忠平.....	一八
太政大臣實賴.....	一四三
太政大臣賴忠.....	一五
左大臣師尹.....	一五
右大臣師輔.....	一〇二

太政大臣伊尹.....	二五
太政大臣兼通.....	三七
太政大臣爲光.....	三〇七
太政大臣公季.....	三二
太政大臣兼家.....	三三
內大臣道隆.....	三四一
右大臣道兼.....	三八〇
太政大臣道長.....	三九二
昔物語.....	四九五

(以上)

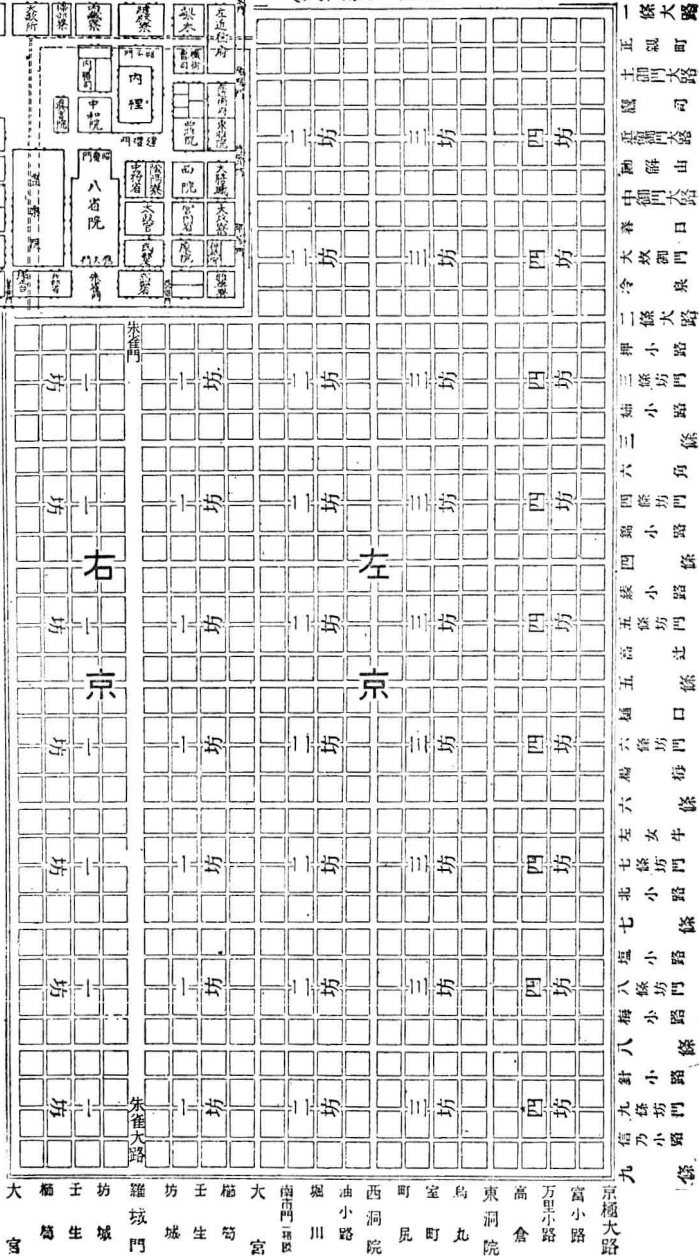
挿註索引

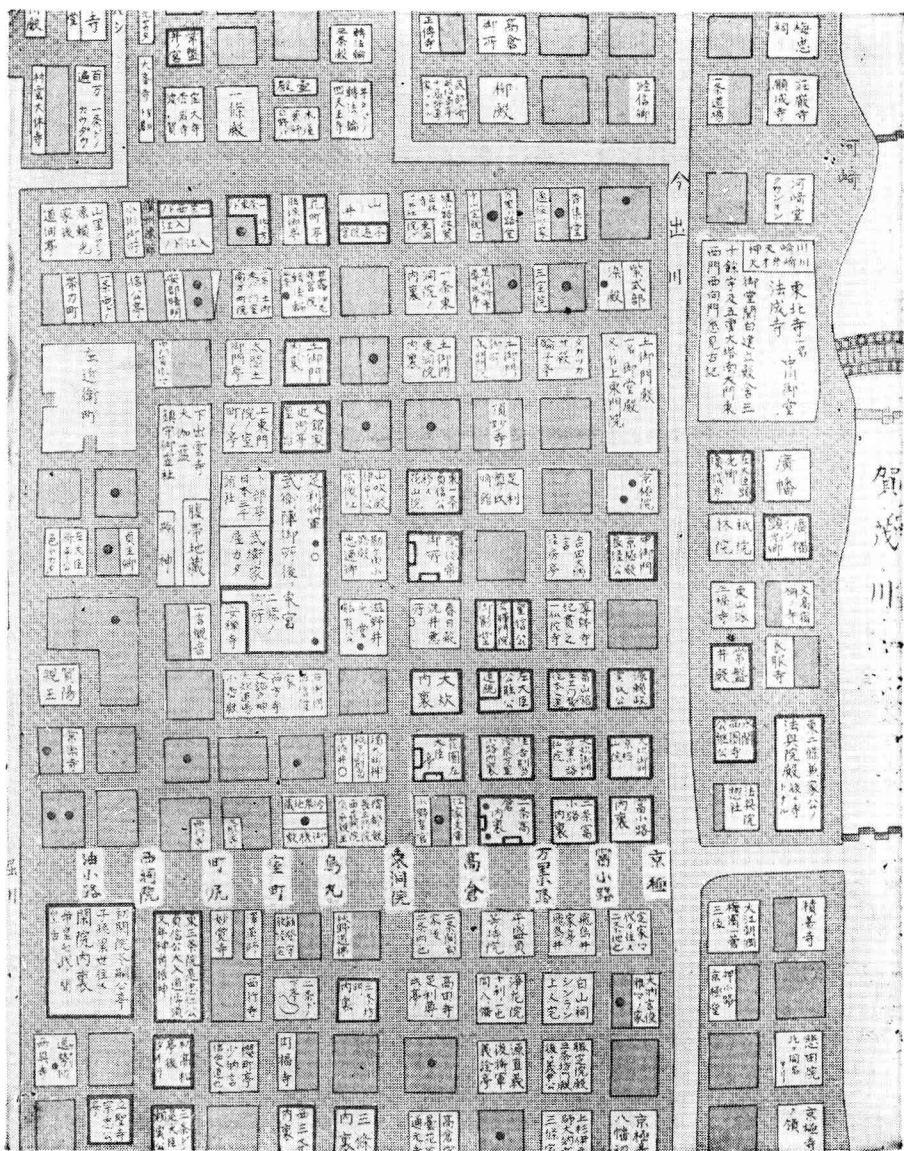
皇室御系圖.....	五九一
十千・十二支表.....	五九一
時刻 方位表.....	五九一
挿註索引.....	五七七

門表定 門表儀 門表建

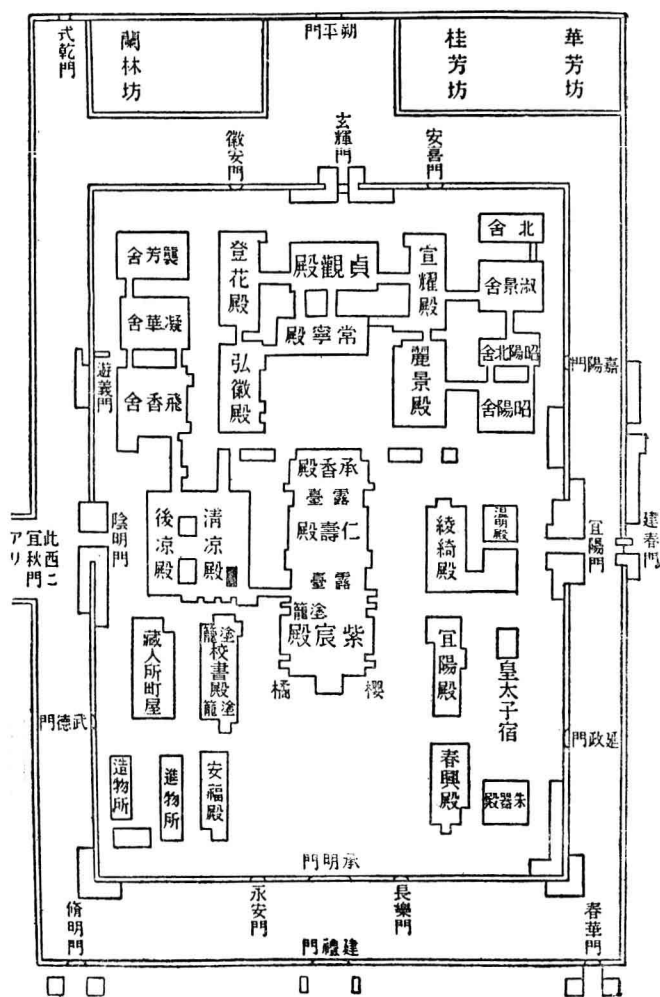


平安京の図 (大内裏の位置及び廓大)

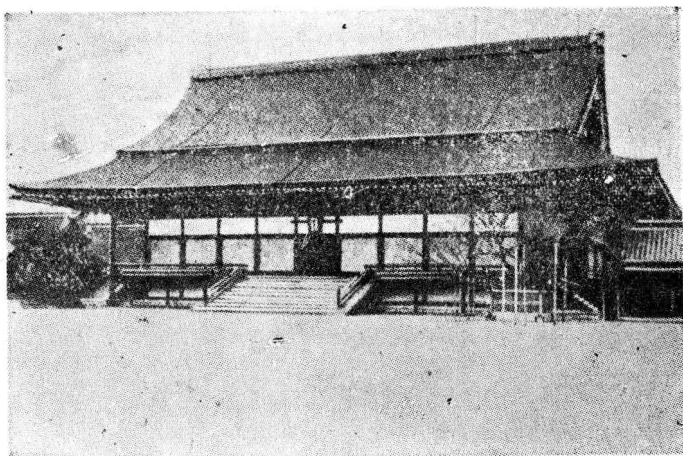




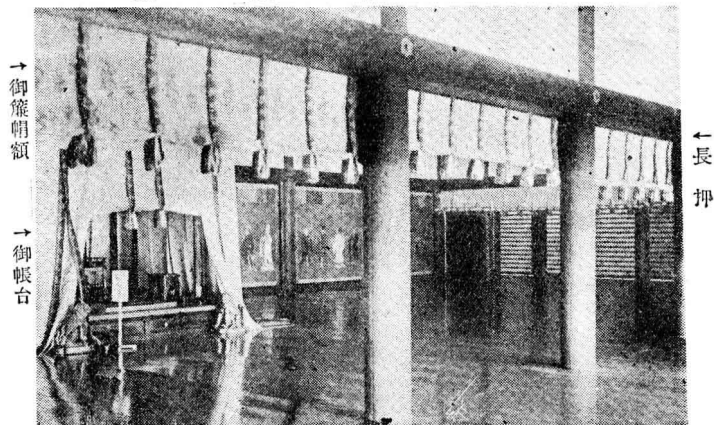
中古京師図の一部



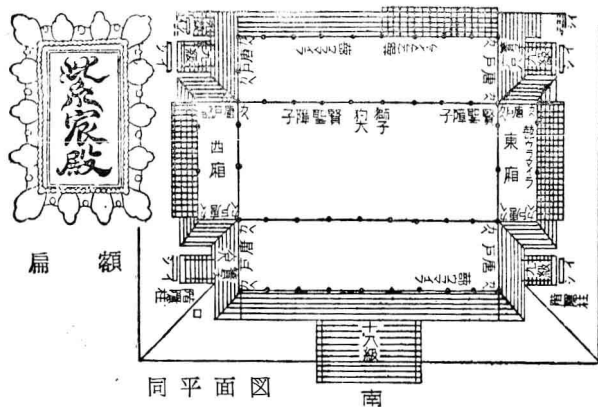
内裏図



紫 宸 殿 (現 今)

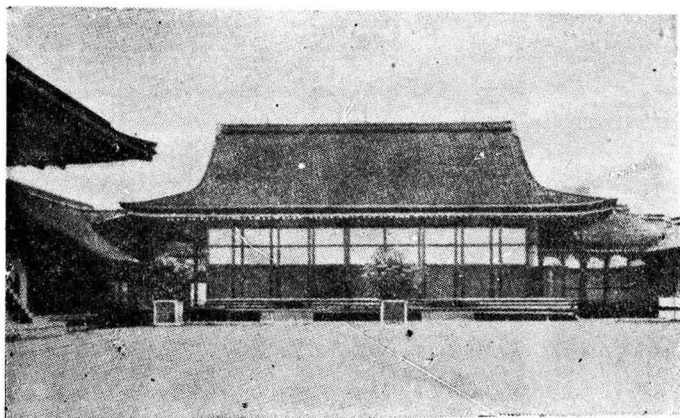


同 内 部 帳 台 の 間 (現 今) ↑ 賢 聖 の 障 子

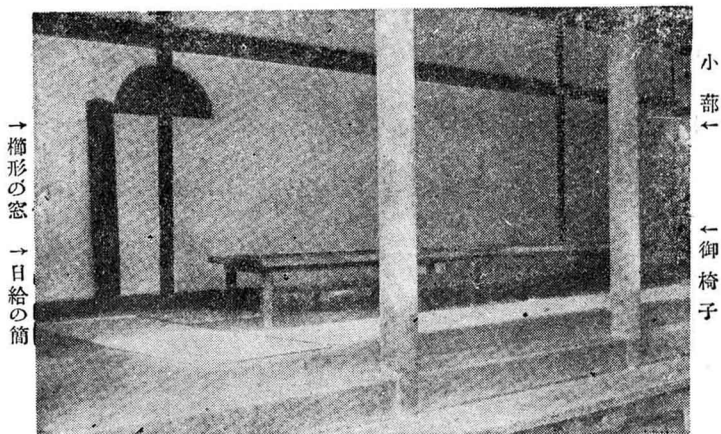


同 平 面 図

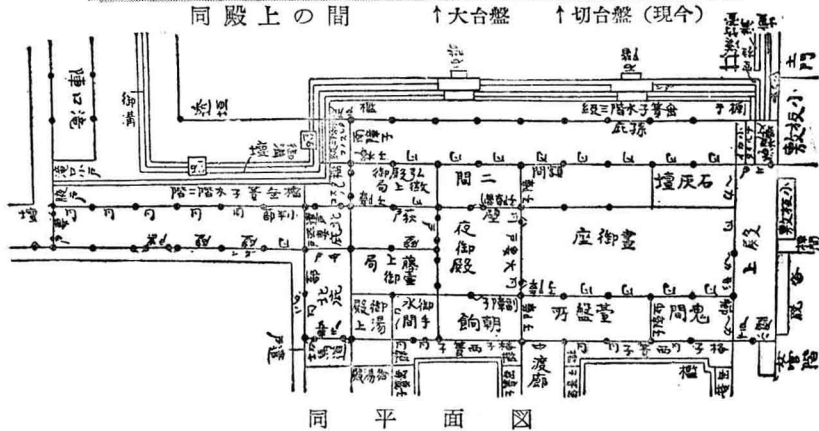
南



清 凉 殿 (现 今)



同 殿 上 の 間 ↑大台盤 ↑切台盤 (現今)



解題

大鏡は、平安朝後期に属する或る時代（恐らくは、白河天皇の御代から崇徳天皇の頃まで、即ち西紀一〇七〇年頃から一二〇〇年頃までの間）に書かれた歴史物語である。著者並に著作年代に就いて、まだ定説とするに足るものがないが、少くとも著者は貴族生活を熟知せる男性であつた事だけは、その内容や文章から想定出来る。

本書は、藤原道長の栄華の由来と、その極盛の様とを写し出す目的で、文徳天皇より後一條天皇の万寿二年に至る十四代の帝紀、及び藤原冬嗣以下、道長に至る藤氏の大臣二十人の列伝を語り、その前に、小説的趣向を持った序文を添え、その後には和歌その他に關する逸話物語を附けたものである。

大鏡全篇の上には、史論的意図と、文芸的意図とが混在しているが、私見によれば、後者の方が遥に優勢である。即ち興味の爲には、往々史実を枉げる事をも顧みないという態度が窺われる。そして、各伝の内容は、寧ろ説話的要素が多く、しかも、同一説話を種々に潤色して、彼にも是にも利用してある如き（貞信公と鬼、師輔と百鬼夜行、兼家と法興院の陰鬼、又、師輔の雙六、道長の的矢の話の如きこれである）、決してその態度は、史学的ではなく、文芸的説話的である。この点、平安末期から鎌倉初頭へかけて盛んに行われた説話文学と共通の要素を多大に持っている。ただ、小一條院の御事、兼通兼家の不和などについては、幾分機微を^{あは}発いた史論的態度が見られるようであるが、これとても、どれだけ史的眞実に触れているか怪しいものである。されば、近來殆んど純粹の文芸作品として取扱われ、史料としては、従来の如く重要性を認められなくなったのではなからうかと思う。但し文芸作品なるが故に、却てその当時（或は著者の時代）の貴族政治の弊害を、史的記述より以上に、濃厚に表現しているという事は言い得よう。

さて然らば、大鏡は平安朝の文学作品として如何なる地位を占めるものであるか。おもうに、源氏物語等の純粹な小説物

語を、現代いう所の純文芸の範疇に入れるならば、大鏡は、今日のいわゆる「よみ物」といったような性質を持っていると思う。大鏡が世継繁樹あるいは生侍という仮設人物の口を借りて、事件を語らせるという趣向を採った為であらう、描写の上に甚だしい拘束を受け、従って表面的事実の推移を、対話口調で叙述してゆく外はなく、到底精細な心理描写などは出来ない事になった。その代り、すべてを實際見聞した事実として語る所に、表面的ではあるが、頗る印象的の感じを読者に与える力があり事件のテンポも速かで、退屈がない。殊に主話者たる世継が異常な魁偉性を持つ老人として表現されて居る為、その用語や語調が、きびきびしていて豪快の感があり、読者をして、いかにも線の太い要領を得た叙述たるの感を起さしめる。然し同じ歴史物語でも、栄花物語の方は、こういう趣向を設けないで、通常の小説的手法を用いている為、相当精細な描写も行われて居り、例えば、同じ小一條院の事件を取扱っても、大鏡では全く捨てて顧みなかった左大臣顕光の周囲の陰惨な生活を、栄花物語では、相当精細に描写し得ている如きこれである。従来、栄花物語は冗漫だというような一概な批評で片づけられ、大鏡に劣るものとせられて居るようであるが、この点は尙慎重に検討されねばならない。

大鏡が、読物的であり、説話的である事の原因としてなお一つ、こういう事が直感せられる。それは、大鏡が、道長時代より、五十年乃至百年の後に書かれたもので、著者の心理に、尙古的誇張の感情が熾烈であったが故であるというのである。西岡虎之助氏は、大鏡は道長の在世中に書かれたものとして、傾聴に値する考証をして居られるが、本書の著者が、道長やその他の貴族に対する感情は、決して同時代的のものとは感得されない。道長にせよ兼家にせよ、説話化された偉人として語られて居るように思われる。かの兼通、兼家、道隆、道長の容儀の美に対する回想的記事の如きを玩味すれば、いわゆる思い半に過ぐるものがある。

紙数の予算超過の為、参考書の主要なものを左に挙げてそれに譲り、この解題とも雑感ともつかぬ拙文の筆を擱くことにする。

尊卑分脈 藤原長良卿流、為業の項

大日本史卷二二五（雄弁社本八ノ一五〇）藤原為業の項

藤岡作太郎博士著、国文学全史平安朝篇六〇二

関根正直博士著、大鏡新註、概論

史学雑誌第三十八編第七号（昭和二七年七月）^{（昭和二七年七月）}、西岡虎之助氏論文、大鏡の著作年代とその著者

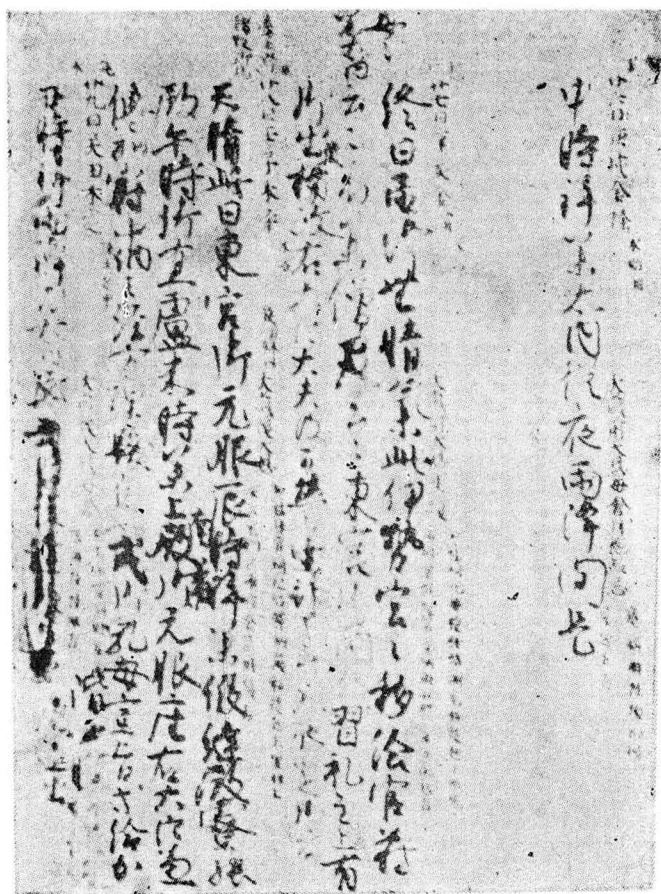
芳賀矢一博士著、歴史物語八三——一〇〇

岩波講座日本文学中、山岸德平氏、大鏡概説

国語と国文学第七十八号（昭和五二年十月）^{（昭和五二年十月）} 平林治徳氏、大鏡の人物裏面観

日本文学大辞典第一卷「大鏡」の項（沼沢竜雄氏執筆）

（解題終）



道長筆御堂関白記(宮内庁蔵)

廿六日庚申：

申時参大内從夜雨降

廿七日辛亥：

終日雨降、無晴氣、皆給伊勢宮、官移官符云々、僧不参云々、東宮御南殿、習礼、主上有御出、攝政、右大臣、大夫可及可然上達部等候云々、入夜還著、

廿八日壬子：

天晴、此日東宮御元服、辰時許参候、縫殿寮張殿、午時御直廬、未時参上南殿、著御元服座、右大臣兼、傳加冠、中納言経房理髮、自餘如式、御乳母宣旨給加階、丑時許、從縫殿退出、

廿九日癸丑：

丑時許雨降、尤有感、